

研究課題	子ども達から地域に発信する「余呉を楽しむプロジェクト」
副題	～9年間を貫いて取り組む「よごふるさと科」(生活科・総合的な学習の時間)～
キーワード	学びに向かう力、思考力・判断力・表現力、ICT活用、愛郷心
学校/団体名	滋賀県長浜市立余呉小中学校(愛称:鏡岡学園)
所在地	〒529-0515 滋賀県長浜市余呉町中之郷777番地
ホームページ	http://yogo-es.nagahama.ed.jp/

1. 研究の背景

本校は平成30年4月に滋賀県下初の義務教育学校として開校した。全校児童生徒1年生から9年生まで合わせても140名の小規模校である。この義務教育学校であることと小規模校であることを最大限に生かし、未来をたくましく生き抜く力と故郷「余呉」を愛する豊かな心をもった児童生徒を育成してほしいという地域の熱い願いが学校教育目標「余呉に学び 大きな心で未来を生きぬく～しなやかに そして たくましく～」に込められている。その地域の願いに応えられるように、前身の余呉小学校と鏡岡中学校で培われてきた「地域学習」を基盤にして、「よごふるさと科」(生活科・総合的な学習の時間)を立ち上げ、これを中心に9年間を貫いたカリキュラムマネジメントに取り組んでいる。

「鏡湖」と呼ばれ日本最古の羽衣伝説をもつ余呉湖、かつて菅原道真が幼少期を過ごしたとされる菅山寺、豊臣秀吉が柴田勝家を退けた賤ヶ岳合戦、奇祭として有名な「上丹生茶碗祭り」など、余呉には魅力的な学習教材が豊富にある。一方で少子高齢化が進み、活力を失いつつある地域は継承者問題が深刻である。そこで「よごふるさと科」では単に地域の支援を受けるだけではなく、地域とともに考え、地域に貢献していくことで地域の活性化を図りたいと考えた。地域のために児童生徒が自身の考えを起案し実践したことをもとに地域への提言として発信することは必ずや児童生徒の主体性や社会性を育み、故郷を愛する豊かな心を育むと考えている。

2. 研究の目的

本研究の目的は「**地域に開かれ、地域に発信し貢献する児童生徒を生み出す学校づくり**」である。地域に発信したり貢献する体験は、将来たとえ余呉を離れたとしても故郷に愛着をもち続け、また社会に出たときにも自分のアイデアや働きかけでより良いものを生み出そうとする原動力になると考える。

まず1年生から7年生では、児童生徒の発達段階に応じて、ふるさと余呉の自然、文化、歴史、くらし、産業に体験的に関わり、学習を積み重ねる。そして学習した内容をICTを活用して発表したり、演劇活動を通じて表現したりする。その学習活動や発表活動の中で、きっと児童生徒は余呉の良さや課題に気づき、その解決策を考えることができるようになるであろう。

そして8、9年生の「余呉を楽しむプロジェクト」で生徒の発想やアイデアを形にして実践する。実践は調査活動、イベントの企画、商品化、宣伝活動など地域に関わり、貢献する活動である。2年間をかけて主体的に実践活動に取り組むことで、ふるさと余呉を愛する心が育まれるとともに、積極的に社会に働きかけていこうとする生徒を育成できると考える。

3. 研究の経過

よごふるさと科の実践は前年度平成 30 年 4 月から取り組んできた。初年度の各学年での取り組みについては写真や動画で記録するとともに、児童生徒が ICT を使って作成したプレゼンテーション等も記録として保存している。また、発信の場として地域の文化イベント「はごろもフェスティバル」を共催し、9 年生の「余呉を楽しむプロジェクト」の発表会（地域への提言）を実施した。

今年度は昨年度の実践の上に全学年の「よごふるさと科」公開授業と 9 年生の「余呉を楽しむプロジェクト」の発表を行った。3 学期に取り組んできた「余呉千年物語」の演劇(3 月 12 日発表予定)は臨時休校措置のため中止となってしまった。非常に残念である。

① 時期	② 取り組み内容	③ 評価のための記録
5 月	8,9 年「余呉を楽しむプロジェクト」オリエンテーション 7 年「余呉湖 PR 動画作成」オリエンテーション、野苺採集 6 年「ボランティアガイド」オリエンテーション、野苺採集 3,5 年「茶碗祭り（稚児の舞）」オリエンテーション 4 年「余呉川の生物調査」	プロジェクト計画(個人) 動画作成絵コンテ 調べ学習 体験記録 調査報告書
6 月	8,9 年「余呉を楽しむプロジェクト」計画作成 7 年「余呉湖 PR 動画作成」撮影と編集 6 年「ボランティアガイド」ガイド原稿作成 3,5 年「茶碗祭り（稚児の舞）」練習 4 年 プログラミング学習 (Sphero)	グループごとの計画書 動画(余呉湖で撮影) 原稿 練習記録 学習記録(プログラム)
7 月	8,9 年「余呉を楽しむプロジェクト」中間発表会 7 年「余呉湖 PR 動画作成」動画発表会 6 年「ボランティアガイド」ガイド練習 3,5 年「茶碗祭り（稚児の舞）」練習	中間発表プレゼン PR 動画(1 人 1 作品) 指導員の講評 写真・動画
8 月	8,9 年「余呉を楽しむプロジェクト」調査、制作	調査の記録、制作物
9 月 10 月	8,9 年「余呉を楽しむプロジェクト」まとめ 7 年「職場訪問」オリエンテーション、動画絵コンテ 6 年「ボランティアガイド」ガイド体験 5 年「茶碗祭り（稚児の舞）」発表(文化祭) 4 年「余呉の自伐型林業」現地視察と体験 3 年「余呉で働く人々」訪問、インタビュー4 2 年「余呉の町探検」訪問、インタビュー4 1 年「余呉の秋を見つけよう」調査	アンケート集計、制作物 職場訪問計画書 写真・動画 写真・動画 体験記録 取材メモ、動画 取材メモ、動画 調査報告
11 月	1～8 年「よごふるさと科」公開授業 9 年「余呉を楽しむプロジェクト」発表会	教師の所感 参加者からのコメント
1 月、2 月	1～4 年「余呉千年物語(白子皇子)」演劇練習 4 年夢の式、7 年立志式	写真・動画 作文、立志文集

4. 代表的な実践

(1) 余呉を楽しむプロジェクト(8, 9年)

5月のオリエンテーションでは、「余呉を楽しむプロジェクト」の主旨についての説明を聞いた後、一人ひとりの生徒が自分のアイデアを1枚の紙にまとめて発表した。お互いのアイデアについて質問や意見を交換した後、同じ方向で進めていける者同士でグループを作り、取り組む具体的な内容について話し合い、決定した。

今年度は9年生が「空き家調査」「アクセサリーや小物づくり」「ゆるキャラ」「インスタ映え」の4グループ、8年生は「余呉を舞台にした小説」「余呉の美味しいもの探し隊」「余呉のオリジナルマップ作り」「余呉にカフェをつくろう」「余呉にスタバ・コンビニをつくろう」の6グループが生まれた。7月にはそれまでの取り組みや方向性をタブレットを使ってまとめ、それぞれのグループが中間発表を行った。中間発表会では大学教授や地域おこし協力隊のメンバー、学校運営協議会委員から各グループに講評してもらった。そして修正等を加えて8、9、10月に実践し、活動内容や提言をタブレットを使ってまとめた。最終的には11月1日のJRC研究発表会にて8年生は公開授業の中で、9年生は体育館のステージで全校児童生徒、保護者や研究会の参加者の前で自分たちの取り組みと地域への提言を発表した。具体的な取り組みは以下の通り。

① 空き家調査

余呉町内19自治会をタブレットをもって聞き込み調査し、それぞれ空き家が何軒あるか調査した。その結果をグラフ化するとともに、全国の空き家利用状況について調べた。実際地域おこし協力隊として地元に住み込み空き家利用を考えておられる隊員から話を聞いたり、市の空き家利用相談窓口を訪問したりして、余呉の空き家を今後どのように活用していけばよいか自分たちの意見をまとめて発表した。



② アクセサリーや小物づくり

余呉湖にはアジサイロードがあり、6月には美しい花が咲く。アジサイを使って余呉の新たなお土産をつくろうと「アジサイ・プロジェクト」が始まった。アジサイをイメージしたゼリー、UVレジンを使ったアクセサリー、アジサイを入れた小さなインテリアのハーバリウムの3つを試作したが、ゼリーについては保存の仕方、成分表の表示や保健所の許可等々課題が多いことから断念した。アジサイの花を使うにあたってはドライフラワー



にするのが難しく苦戦した。しかし最終的にはUVレジンを使ったアクセサリーとハーバリウムの小物を商品化することができた。余呉湖にある観光館、赤子山にあるウッディパル余呉、賤ヶ岳サービスエリアに商品を置いてもらえないか交渉し、10月には販売することができた。最終の発表会では商品化する上で苦労したことや実際にその商品が販売できた喜びなどをタブレットにまとめて発表した。

③ ゆるキャラ

昨年の9年生が余呉町認定のゆるキャラをつくろうと全校児童生徒や地域にアイデアを募集、その結果生まれたゆるキャラをさらに有名にしていきたいというメンバーが集まった。まず「天女（そらめ）ちゃん」というゆるキャラをタブレットを使ってしっかりデザイン化し、ゆるキャラの詳細を決定。「いらっしやいませ」などの吹き出しをつけたポップを作成して、余呉駅や余呉の店舗に交渉し、お店の入り口に貼り付けたり、レジ付近に置いてもらうなどして使ってもらった。ゆるキャラの人形作りにも挑戦したが苦戦し、断念した。そしてゆるキャラが入った缶マグネットをつくり余呉町の全戸配付することに変更した。その取り組みを発表した。



④ インスタ映え

余呉の美しい自然や、菊水飴などの特産物、美味しいお店などを取材し写真をInstagramに投稿した。インスタ映えする景色などを求めて活動したが、ゆるキャラの顔出しパネルを設置して写真を撮る場所をつくるというアイデアに行きついた。後半はゆるキャラ「天女（そらめ）ちゃん」の顔出しパネルの制作にあたり、発表会ではインスタ映えする写真とともに顔出しパネルを紹介、地域の方々に設置する場所を募集した。



⑤ 余呉にカフェ、コンビニをつくりたい(8年)

もとは2つのグループでスタートし、中間発表会ではそれぞれの考えを発表したが、まず住民はどのように考えているのか調査しようということになり、合同でアンケートを作成、1130軒全戸配布して、120枚を回収し分析した。その結果をタブレットにまとめて公開授業の中で発表した。

⑥ 余呉を舞台にした小説(8年)

メンバーは2人。それぞれが「水色の町」「空色の町」という小説を書いた。いずれも余呉を舞台にしている。「水色の町」は余呉が嫌いな女の子が捨て猫との交流の中で変容する物語、「空の色の町」は帰ってきた天女に出会う男の子の物語で、面白い作品に仕上がっている。タブレットを使って写真を加工し素敵な表紙をつけて印刷した。発表会では作品を自由に読んでもらえるように展示した。

⑦ 余呉のオリジナルマップ作り(8年)

余呉の観光マップをPCやタブレットを使ってつくろうと考えた。撮影してきた写真などを入れて魅力的な観光マップにして駅などにおいてももらう予定だったが、一応完成したものの更に改良する必要があるという現状について公開授業で発表した。

(2) 余呉湖 PR 動画、職場訪問動画作成

7年生はICTを活用した動画づくりに取り組んだ。1学期はiMovieの予告編作成を使って余呉湖のPR動画を1人1作品作成した。タイトルを考え、どのような映像をどこに入れるか絵コンテの計画を立てた後、余呉湖に行き行ってタブレットで写真やビデオを撮影。編集して作品

を仕上げ、第2ステージ（5～7年）の集会にて発表会を開いた。

また、2学期は名古屋に職場訪問に行く計画の中で、訪問を3分くらいの映像にしてまとめ訪問した企業に見ていただこうと計画した。iMovieのムービー作成で絵コンテを考え、計画的に職場訪問先で見学したものやインタビューの様子などを撮影した。午後からは、全員がApple栄店にてフィールドトリップ研修に参加、撮影してきた動画を編集する技術を個々に教えてもらった。これも1人1作品を仕上げ、計画通り訪問先の企業に送付した。この動画も第2ステージ（5～7年）の集会にて代表者が動画を披露した。

5. 研究の成果

(1) 地域への発信と貢献

「余呉を楽しむプロジェクト」ではアンケートの実施、ゆるキャラ缶マグネットの配付を余呉町全戸に行った。またゆるキャラ入りポップが余呉の店舗に設置された。アクセサリーやハーバリウムの販売も話題になり多くの方が買ってくださいました。「空き家調査」にしても聞き込み調査をする姿は地域の方の目に触れている。また、地方紙にも記事が出たことで、その取り組みが広く市内にも発信できたと考える。

また、継承者がなく継続が危ぶまれる「茶碗祭り（稚児の舞）」を「よごふるさと科」で取り組み、その中の有志が「丹生谷フェスタ」や「長浜芸能と祭り」といった地域の晴れ舞台で活躍したことも、保存会の皆さんに喜んでいただくなど地域への発信になったと考える。5年生が文化祭で稚児の舞を発表したので、保護者にもその祭りについて発信する機会となった。



(2) 社会への参画意識の高揚

本校では毎年 i-Check を実施しているが、本校の9年生は「社会参画」が全国比55で高かった。また、全国学力学習状況調査の質問紙においても「今住んでいる地域の行事に参加していますか」では57.1%が当てはまる（どちらかといえば当てはまるを入れると82%）と答えている。これは全国平均20.6%(49.9%)をはるかに上回っている。さらに「地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがありますか」では本校は23.8%（どちらかといえば当てはまるを入れると57.1%）であり、全国平均11.5%(39.4%)を上回っている。これは昨年度から取り組んできた「余呉を楽しむプロジェクト」も影響していると考えられる。

生徒の感想にも多くがこの体験を通じて故郷余呉への理解が深まり、故郷への思いが強くなったと書いている。「余呉を楽しむプロジェクト」が着実に故郷を愛する気持ちを育んだと確信している。さらに今年度は自主的に学校の環境整備を行う生徒が現れた。「空き家調査」に取り組んだ生徒たちである。花壇の整備や学校周辺の清掃など夏休みや早朝に黙々と活動する姿に感動した。何が生徒を動かしたのか明言はできないが、このような生徒の姿も「余呉を楽しむプロジェクト」での取り組みの成果ではないかと考えている。

6. 今後の課題・展望

(1) 発信力の拡大、遠隔授業の実現

本校の取り組みを余呉、長浜市内だけではなく、広く滋賀県、他府県、さらには海外に広げていくことが今後の課題である。そのために ICT を活用しての遠隔授業に取り組む。また、今後生徒がどのような課題意識をもち、どのようなプロジェクトを発想するかはわからないが、その発想を現実のものにするために、遠隔授業を通して高校や大学と連携したり、また企業等とつながったりできると考えている。

例えば、本市では「学びの実験室」という事業があり、長浜バイオ大学で高性能の顕微鏡等を使っての解剖や実験等を指導してもらっている。遠隔授業で教室にいながら実験を見たり、学生の研究に参画することもできるのではと考えている。

(2) 「よごふるさと科」「余呉を楽しむプロジェクト」を持続可能な取り組みにする体制づくり

教職員は異動により入れ替わり、義務教育学校として開校した当初の地域の熱い思いや学校理念は置き去りにされることが予測できる。特に「総合的な学習の時間」は専門の教科担当もなく、教員の経験値には期待できないし、ましてや新たなものへの取り組みには尻込みする教員も多いのが実情である。今まで積み上げてきた「よごふるさと科」「余呉を楽しむプロジェクト」が持続できるような仕組みや体制をつくるのが課題である。

次年度の校内研究では、一つひとつの単元について明確な狙いとそこに秘められた教師の願い、期待する児童生徒の変容、評価基準、指導と評価の計画などを明記した指導案集を作成する予定である。また、計画的な ICT 活用の教職員研修も必要と考えている。そして何より地域が本気になって、地域の子どもたちを地域で育てるという気持ちで、学校教育に参画してくれるように、保護者や地域の人々の意識改革を図る必要がある。

児童生徒の取り組みが、保護者や地域の人々を啓発し、学校が地域を育てていくことができれば、少子高齢化社会においても活気のある社会、豊かな心で生きていける社会を生み出せるのではないだろうか。

7. おわりに

今年度の研究推進にあたって、この研究助成をいただいたことで、生徒の発想したアイデアを実現することができたと深く感謝いたします。

これからの時代に生きる子どもたちは創造力を働かせることが生き抜くための大切な力であると考えます。しかし、私たちが忘れてはいけないのは、創造力は教え込むものではないということです。子どもたちの発想にはすでにキラキラ輝くものがいっぱい詰まっているのではないのでしょうか。もっと子どもの感性・発想を大切にすべきだと考えます。そして自分たちの知識や経験を、子どもの発想を広げるために使うのです。教え込む教育ではなく、自ら学ぼうとする力を育てる教育への転換を、この研究で果たしていけたらと思います。

8. 参考文献

・なし